

別
れ
の
言
葉

大正九年吾が横濱高工創立以來全校的信望を負ふて、吾等が父として敬慕されて居た鈴木校長は、去る二月十三日突如として學園より去られるに至つた。凡々たる機械的職業教育の風潮の中に毅然として、かゝる傾向を排して横濱の一角より自由啓蒙主義なる新らしき教育的指導原理を唱道し、幾多盤根錯節を打ち碎き光輝ある自由の孤城を固守し、しかも一切の社會の批判に超越し只管自己の信念貫徹に勇氣と情熱とを以て邁進し來たつた巨人鈴木先生の辭職は、全校友の胸に悲痛な哀別の苦惱を與へたのである。……………

(昭和十年二月二十五日發行横濱高工時報の一節)

「別れの言葉」は鈴木先生があらゆる苦闘に堪え、幾多艱難を克服し自ら培つた横濱高工に今ぞ悲痛なる訣別をなさんと、二月十四日午前十一時哀愁と緊張に極度の昂奮で包まれた講壇上でなされた悲壯なる訣別の挨拶を速記したものである。

先生の此の訣別挨拶に滿場暗涙に咽び、別れを惜しんだのである。鈴木先生も、昭和十年二月二十七日のホテル ニューグランドにてなされた横濱工業會の新舊校長送迎會席上に於て、次の如く述べてゐられる。

……十一時に私は講堂へ行つて壇の上へ上つたところが學生の中から聲を出して泣く者が出來て來た。それには私も面喰つた。私はその時、かうまで皆が私のことを思つて呉れるものであつたらば十五年間にもう少し勉強したら宜かつた。少し勉強が足りなかつたとしみ／＼思つた。……「疾きこと風の如く、靜かなること林の如し」とは止に此の際を評する適言であつた。

私は多年この講壇で諸君にお目に掛つて参りました。が今日は本校々長として諸君に訣別の言葉を申し上げねばなりません。然して諸君が斯く多數御集り下さつたことは、私の洵に光榮とするところでありまして、衷心より謝意を表する次第であります。

人間がこの世に生れ來ました以上は必然的に何時かは死なねばなりません。同じやうに一度職に就いた者は必ず何時かはその職を辭せねばなりません。然して死は天命でありその死期を定める事は出來ません。いくら五十歳まで生きて居たいと念願してもその願は容れられないかも知れません。況んや百歳までの壽命は望んで得られるものではありません。翻つて辭職の場合はどうかと言ふと、その原因が他動的に存在しない以上は、各人の自由意志で決することが出来るのであります。そこで人間の出所進退と言ふことが甚だ意義深いものとなりますのであります。その同じ進退をするにしてもその時期の如何が問題となるのであります。死は人生の歳末總決算であるとしませれば其進退は人生の半期決算でなければなりません。特に公人としての場合にその重要性を認めねばなりません。

私の今回とりました辭職の形式と時期に就いては、叙上の意味で充分熟慮の結果最善の方法と確信して斷行を敢てしたものであります。廻つて本校創立の當初に於いて私は十年間無事に其任

務を果し得たなれば、潔く後進に道を譲るべきであると考へたのであります。然しその後十年經つて見まするとまだなすべきところをなし、果すべきところを果してゐない未練さと執着の迷ひが出て參りました。そこで當時兼務した縣立商工實習學校々長の職を辭したに止まり、更に五年の間本校々長としての職を繼續したのであります。

然るに今や滿十五年となりました。この長い年月の間私は實に幸運にも何等の支障を受くることなく一路坦々今日あるを得たのであります。私は二六時中何等かの異變があり、責任をとるべき必要のある場合を豫想しまして精神的には肌身を離さず辭表を抱いてゐたのであります。が然し大過なく去一月十九日を以て滿十五年に該當するに至りました。私はこの日の來るを只管待つてゐたのであります。そこでその日の十八日にはこの講堂で校長として最後の講演を致したのであります。その時に私は特に明日は創立滿十五年に當ると言ふことを申上げたのであります。無心に聽かれた諸君には別に何等の意味にとれなかつたかも知れませんが、私としては實に感慨深いものがあつたのであります。と申しますのは既にその時は私は辭表を懷してゐたのであります。

その翌十九日に文部省へ辭表を提出しました。一體官吏が辭表を出す場合には、病氣で其任に

堪へないからと言ふことを理由にするのが普通の形式となつてゐます。それは官吏は自分の勝手に職を辭することが出来ないと言ふ建前からであります。然し私の場合は些か趣を異にしてゐます。私は従前の形式に拘泥することなく自分の心境を最も卒直に書き表したのであります。

即ち

私儀本年ヲ以テ頽齡六十五歳ノ春ヲ迎へ、且當一月十九日ヲ以テ本校創立滿十五ケ年ニ相達シ申候ニ付キ此機會ヲ以テ退職仕度此段御願申上候也

と言ふ文面でありました。

ところが文部省では事が突然であり且私の辭職を惜まれ慰留の言葉がありました。私は自ら決意したことであり、その聽許を求めました。又辭表の文面も異例ではありますが、反つてそのまゝ受理せられることゝなりました。この場合私は文部省當局の方々が私の心境をよく掬んで下さつた御好意に對して厚く謝意を表してゐるものであります。そうしてこの辭表は當局へほんの暫しの間お預りを願ひたい。それは自分だけ學校を去ればよいと言つた譯には行かないので、跡始末の工作をしなければならぬからと言つて、これも聽き届けられたのであります。

そうして歸校後私は數氏の教授の方々に、辭表提出の次第と校内の人事行政特に經綸上の行詰

りを述べ、その打開を策し、且更始一新を期すべく勇退した心境を述べて、共々にこの際行動を一つにして戴きたいと苦衷を披瀝したのであります。その時昨日勅選待遇となり、同時に依願免官となりました三教授は、全く私に同意せられたのであります。私はこの三教授の私心を捨てた義理人情と友愛の深いこと、並にその態度の立派な點に對しまして、心から感謝するものであります。

尙この外に二名の教授の方が私と行動を共にすることとなり辭表をお出しになつてゐます。然しこの方々はもう少し御盡力を願ふことが残つてゐますので私が或時期までお願ひすることゝなつてゐます。更にこの外に兩三氏が進んで私と進退を共にしたいと言ふことで辭表を御提出になつてゐます。その眞情洵に有難く感謝致してゐます。十五年の長き間微動すら起らざる太平圓滿なる校務を遂行致しました上に、その退職に當りまして斯くの如き數々の美しい人情味を與へられたことは、この上なき私への饒けであり有難くお受け致す次第でございます。又同時にこれは我横濱高工の誇るべき美風の現れであると思ひます。然しこれ等自覺的の辭表提出の方々には、私から極力慰留を致したいと思ひます。

私は今この學校を去るに當つて決して他意はありません。世の中には多少のデマを飛ばすもの

もありません。或は私が事業界へ出るであらうと言ふのです。然し同じ働くならば私は寧ろこの學校に留つて猶三五年働くであります。又他の方面で教育に従事するであらうと言ふ噂も矢張り同様であります。其他の色々な噂も要するに臆測であるに過ぎないのであります。勿論私はこれから當分の間隠居をする考であります、然し私はまだ著録したとは考へてゐないのであります。國民の一員として爲すべき事は爲し得ると考へてゐるのであります。

辭表を當局に差出しました時に三月の卒業式後に發表してはどうかとのお話でありましたが、一月から三月まで辭表を保留して卒業證書も私の名で渡し得ると言ふことは洵に有難いお志であり、これは教育者としての本懐であるのであります、又翻つて考へますと一旦辭表を出した以上は何處まで完全にその秘密が保たれるか、これは人間の仕事である以上、絶對的の保證は致し兼ねるのであります。若しその秘密が洩れたとなると必ず色々な面倒な事がそこに起るに違ひない。これは矢張り速決がよいと言ふやうに考へられましたので、左様に處置をして戴いた次第であります。

私は爰に辭任しました。さてその次に來る問題は當然後任の問題であります。私は昨日新たに任命せられました富山保博士を推薦致したのであります。私は後任として同博士を推薦致しまし

たところ、當局に於いては何等の異議なく決定を見たのであります。富山先生に就ては諸君も御承知であらうと思ひますが、本校が大正九年創立當時から講師として御關係になり、一方當時東神奈川に在りました横濱舍密研究所の主任として、其經營に當られました。舍密研究所と言ふのは化學工業の研究をなすのを目的として、原三溪先生並に中村房次郎氏の共同出資になつたものであります。然るにその後主任の富山先生に對し、東北帝大は小川正孝總長の辭任後の後繼者として、同大學から就任承諾方の交渉がありました。これは私に對しても再三照會があり、富山先生に對して直接の交渉もありました。

遂には小川總長自身が横濱まで出馬され、或は只今大阪帝大の理學部長眞島利行博士や東京帝大理學部の片山正夫博士などが、交々勸誘に努められたのであります。然し富山先生はこの立身出世と學界御歴々の熱願をさへ、振り切つて了つたのであります。富山先生の當時の心境を付度致しますと、それは自分は今この研究所の中心である。若し自分が自分の利益の爲にこれを打棄てたならばそのあとはどうなるであらうか、又化學工業の爲に私財を惜しまなかつた篤志の人々に對しては何と申譯が出来ようか、斯く考へられて將來を約束せられた東北帝大總長の榮位を捨て、も、一小研究所を護らうと決意せられたのでありませう。

私が書き残して置いた「自由教育の片鱗」なる小著の中に名節に關する所見を述べて、「責任を重んずる人、名節を尙ぶ人、彼は頼もしき人、彼は苦節を共にするに足る人と我も許し人も許す人格者」と言ふ一齣がありますが、これは暗に富山新校長の人格を言つたものであります。この舍密研究所は昭和四年頃まで續いて解散となりました。その後も富山新校長に對しては或は三井から或は住友から招聘を受けられたのであります。初一念を通して横濱の孤城を守られたのであります。最近に於ても日本揮發油會社と言ふ大會社の重役となられました。これはこの一月中旬のことです。その最初の重役會議が昨日東京で開かれ、富山新校長も列席せられたのであります。その日偶然發令があつた次第であります。富山新校長は私から突然の交渉であり其進退については色々御事情のあつたことと思ひます。

それはこの會社の外に他の會社にも御關係があり、その方も校長就任と同時にやめられねばならぬと言ふ事情にもあり、其去就は到底簡單に決することの出来ないのは、私も萬々承知でありましたし、富山新校長も其任にあらざる旨を以て、再三再四固辭せられたのであります。然し遂に其總てを抛つて御承諾下さつたのであります。

私が辭表を提出して以來今日まで二旬以上を經過してゐますが、この間校内の職員間にも又學

生諸君にも些かも感知せらるゝことなく過して参りまして、その間豫定の工作を疾風の如く斷行し得たのであります。即ち昔の兵法が教へる疾きこと風の如しの一句を實行したのであります。諸君は私のこの心事を御賢察願つて、私のとつた行動の全部をどうか無條件で御賛成願ひたい。そうして御支持願ひたいのであります。そうしてその全校の態度を靜かなること林の如しと言ふ對句によつて處置して戴きたいのであります。

疾きこと風の如しと言ふ句は私が實行しました。従つてその後句である靜かなること林の如しの一句は諸君によつて實行して戴きたい。これが私の願であります。昔支那で宋に蘇老泉と言ふ文豪がありました。この文豪は又一面に於て仲々鋭い論客でありました。彼は管仲論と言ふ論文を書いてゐます。この管仲論は今日でも仲々愛讀者が絶えません。この論文の中に彼は言つてゐます。管仲は齊の威公に宰相として政治を執り、又諸侯と聯合して覇權を握り、富國強兵によつて國は隆盛に赴きました。そうして彼が死すまで治國平天下を謳歌されたのであります。一度彼の死に會ふや、威公は豎刀、易牙、開方の三小人を重用した爲に、齊の國は亂れ威公の死後は五公子が互に位を争つて、國に平和な時がなかつたのであります。

そこで問題となるのは管仲が死に當つて、何故其後繼者を選んで威公に推薦しなかつたかと言

ふことであります。ただ單に豎刀、易牙、開方の三人は小人であるから用ひられないようにと言ふだけであつたのは、管仲の用意が餘りに足りないと言ふ點を、彼蘇老泉は大に責めてゐるのであります。そうしてこの論文の終りに次のやうな文句が書かれてゐます。

吾觀るに、史歛は、遽伯玉を進めて彌子瑕を退くる能はざるを以ての故に身後の諫あり、蕭何は且に死せんとし、曹參を擧げて以て自ら代る。大臣の心を用ふる、固より宜しく此の如くなるべきなり。

夫れ國は一人を以て興り、一人を以て亡ぶ。賢者は其身の死するを悲まずして、其國の衰ふるを憂ふ。故に必ず復た賢者ありて、而る後以て死すべし。彼の管仲は何を以て死するや。

蘇老泉はこゝういふ鋭い筆法を以て管仲を責めてゐるのであります。或は諸君の中には蘇老泉のやうな鋭い人が澤山居られるかも知れない。そうして彼校長は何を以て辭するやと私を責められるとしたならば、私は充分その責に任じることを決して辭するものではありません。

冀くば親愛なる諸君、私の辭した此の瞬間、又その後も林の如く靜かに然かも歩武堂々と、我横濱高工の名譽と威力を天下に明示せられんことを熱望して歇まぬものであります。これを以て

訣別の辭と致します。

(一〇・二・一三)